



魔法巫女  
パーティ  
レイル

MAGIC SHAMAN  
PRETTY REIMU

18  
ADULT ONLY





魔法巫女  
パーティレム

MAGIC SHAMAN  
PRETTYREIMU

18  
ADULT ONLY

魔法巫女  
プリティ  
MAGIC SHAMAN  
PRETTYREIMU  
レイルム







私の名前は  
フリテイ・レイムよ

言いたいことは  
それだけか!!



.....



何...してんだ...  
霊夢...  
神社に遊びに来てみれば...



霊夢さん!!  
これからの信仰獲得は  
魔法少女ですよ!!  
もしくは巨大ロボ!

まっちゃん



いえね実は  
少し前に早苗と  
話してたんだけど...



※小説版儚月抄参照

ヤメロ  
壊れる壊れる!!

何が碌ハモベ

今世 mekashi

この間急にウチにきて  
※変身魔法教えて欲しいって  
言ったのはこのため  
だったのか.....

上り理沙



守矢はこうやって  
信仰を得ました!

なんかてっとりばやく金...  
じゃなくて信仰を得るためには  
変身ヒロイン?でいうのが  
いいんだって

オラオラ  
オラオラ

おい本音





ホーンッ

1/10 ヽ

うわあああああ  
恥ずかしいいいい!!

ラジカル☆マジカル

キラキラ

1/10 ヽ

1/10 ヽ

1/10 ヽ

チェーンジ!

1/10 ヽ





そ、それはそうと、やっぱり私にも霊夢みたいな名前…あるのか…？



見てろよおお!! お前がやれって言ったんだろ!!

あ、終わった？



# 魔法使い キリサメマリサ

私は魔法十巫女だから魔法巫女だけど、魔理沙も魔法魔法使いのほうがいいか？

そういうことじゃないよ！むしろ☆とか+のせいでいつもより痛々しいよ！

ええ。貴方は「魔法☆使い キリサメ+マリサ」よ  
あれええ職業も名前も変わってないんだけど!!



魔理沙ッ！  
危ないっ!!



痛い  
痛い  
痛い  
アッ  
アッ  
アッ



あんたそんな恥ずかしい名前を自分で…

も、もつとこう…ほら…  
マジカルウィッチ  
キューティー☆マリサ…とか





なっ、なんだ  
この妖怪はっ!!



霊夢ッ!!



このっ  
霊夢を離せっ!!



霊夢っ...どうして  
反撃しないんだ!?

まさかあの触手から  
霊力を吸われて  
いるのか...?



くっ...  
効いてないのかっ



じゃあ変身しないほうが  
強くない!?

フリテイレイムは  
賽銭箱が空だと  
力が出せないのよ

賽銭箱がカラッポで  
力が出ない……



こ、このおっ……  
はなせ……

魔理沙!

あっ!  
しまった!  
ツツ子に魔を取られて……



ひああっ!  
つ、冷たっ……  
何…!?





ちくびで気持ちよく  
させられるううっ♡

んはああああんっ♡  
やっやだっ…やだあ♡



あ…あ…  
な、なんだコレっ…

んんっ…あっ!  
はやああああんっ♡

ああっ♡  
あっ♡あっあっ♡

身体…熱…くっつてっ…

ちくび…すっごく  
ピンカンにされて…っ



ああっ…おまんこ…  
触られてないのに…っ

おっ♡  
んああっ♡

いやあっ  
ちくび…ダメッ♡

んああああああっ♡  
す、吸っちゃ…っ♡

んあああ♡

濡れてヒクヒク  
してるううっ…

しおお









うああっ…  
や、やめっ…

んあっ…あっ…  
この…おっ

ああっ…!!  
レイムまでっ…

あっ

は、離さないと  
後で酷いわよ…っ



ク、クリ…  
勃起しちゃうううッ♡

だ、だめだめえっ



こ、これっ…  
魔理沙とおんなじ…っ





執拗に……♡



こ、こいつっ♡  
ク、クリぱっかりッ…♡



しんみ  
しんみようまる……っ



あーあー



ひいひい♡か、皮  
剥かれ…♡  
スーツの上からなにに器用すぎ！スツ



やあああああ…  
は、入ってきちや…ツ



んひいいいいいっ♡  
ムキマメ責めえええ♡

ほおおおおっ♡  
クリシゴキだめえええ♡

だめええイクっ♡イクイク  
イクっ♡イクうう♡

イグううう♡  
クリイキしちやうう♡











んふううううううう♡  
イクっ♡イクううう♡  
またイカされるううう♡

はやああああ♡  
私もっ♡イクうっ♡  
イっちやうううう♡

ゴゴゴ  
ゴゴゴ  
ゴゴゴ



はあああ...だ、ダメえ...  
ここのまじや  
私達...♡



ド  
ド  
ド



新しいお賽銭よーッ!!

レィムー!!

ト里で集めよう

ド  
ド  
ド

これは…っ  
力がみなぎってくるわ！



スーパーンチー！

物理かよ!!  
その杖みたいなの  
何だったのー!?

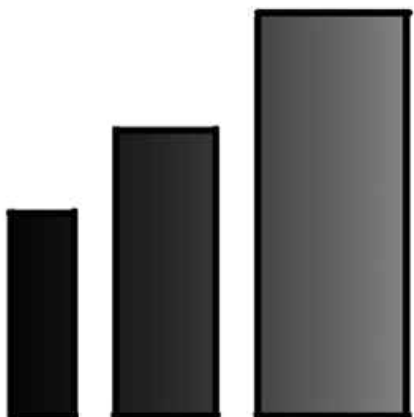
そして  
なぜか爆発したー!!

ハッ  
ヒッ  
ン



ふう…  
強敵だったわ…

フ  
ェ  
ッ







## あとがき

この度は当サークルの本を手にとって頂き、ありがとうございます。  
翡翠石です。

今回は以前から描いてみたかった東方魔法少女モノです。

東方でふたなりじゃない漫画は最初の1冊め以来の久々だったりしますw

以前からギャグマンガを描いてみたいと思っていて、

今回の漫画ではエロとギャグを半々くらいのバランスで入れてみたのですが  
如何だったでしょうか？

個人的にはどっちも中途半端になってしまっていていそうで怖いです…。

一応、最後をつづくで締めています、続きがあるとしたら、エロかギャグの  
どちらかに寄せていきたいですね。

エロなら次はちゃんと本番を入れた魔法少女の即堕ちモノとか  
描いてみたいです…！

今後の活動予定ですが、3月のコミケットスペシャルに参加予定です。

東方での参加はいつものふたなりシリーズに戻って例大祭に参加します。

東方では一番大きなイベントなので、今から楽しみです。

いろいろとオマケなんかも作って持って行きたいと思っていますので  
楽しみにしててくださいね！

それでは、ここまで読んで下さってありがとうございました。

このあとは灯籠さんに頂いたゲスト原稿となっております。

最後まで楽しんで頂ければ幸いです。



（ご挨拶…こんにちは灯籠です。ゲストのお誘いありがとうございます！少し変わったシチュですが、書いてみたかったですよね。ちなみに本編とは何の関係もありませんので悪しからず。それではどうぞ）

＋＋＋

「ん……何だ？　ここは……？」

暗い。マリサの意識は次第に明るさを取り戻していたが、その視界は暗いままであった。幽かに照らす光を頼りに、現状を把握する。

（私……眠っていたのか……）

ここは、森だ。魔物を退治しに来ていた筈だったが……森の奥から、何か甘い香りが漂って来たのだった。そして、マリサの記憶はそこで途切れていた。

（くそ……毒か。しかし）

毒を食らわされた後で、何かをされた気配が無い。と言う事は、魔物が逃げる為の煙幕だったのだろう。

（逃がしてしまったが、さて）

月明かりも届かぬような樹々と枝々、視界は恐ろしく悪い。今日は帰って出直す方向に考えが傾いたその時、グチュリと奇妙な音が微かに耳に届いた。

「！　まだ近くにいるのか！」

選択の秤は一気に討伐へと傾き、音のした方へ向き直る——と、マリサはその場でバランスを崩してしまった。

「うわ!？」

何者かにやおら杖を掴まれ、咄嗟に握り返す。それでも引っ張られるので両手で押さえるのだが、少女の力では到底抗えぬパワーで引っ張り上げられてしまう。

「う、くそ……しまった」

何か触手のような物が、杖を捕らえていた。マリサにとっては標的であ

るはずの、魔物の物だ。

予想を上回る機敏な触手。他ならぬ油断によって動きを封じられたマリサは、悔しさを噛み締める。

とは言え、杖を奪い返さぬ事には反撃も始まらない。半ばぶら下がるようにするマリサに、新たな刺客が訪れる。

ニルニルニル!

「わっ！　何だ何だよ!？」

マリサの足から脚へと、ネズミよりも素早い何かが這い上がって来る。

「くそおっ！　離れる気持ち悪い!？」

脚をブンブンと振り立てて宙を踏み付けるが、何の効果も成さない。ミズのような触手を脚に絡ませながら、瞬く間に腿まであるタイツを突破し、ぬめった感触を内腿に伝える。その気持ち悪さに身動きをする間も許さず、スパッツに到達したところで『それ』は動きを止めた。

その見た目は、一言で形容するなら『舌の化け物』だ。舌形動物、と言うのがあるが、それではない。それは人間の舌の形をしている。舌の表面は『乳頭』と呼ばれる無数の突起が生えているのだが、その化け物なのだ。即ち、大小様々な形状の突起がびっしりと生えている。

内側の肉突起を蠢かせ、這うようにスパッツの上を移動する。あまりのおぞましさに、マリサは身体を強張らせたまま抵抗出来なかった。

無遠慮な侵略者は、腿の間に挟まるようにすると、その体を股肉へと押し付け始める——イボと触手にまみれた、腹側を。

くちゅうっ。

「んっ!？」

身体の中でも敏感な箇所を圧迫され、マリサは小さく呻いた。足先から太腿の辺りまでも『ぞわぞわ』『にちゃにちゃ』とした鳥肌立つような感触が駆け上がっていくようだった。

ふっくらと盛り上がりを見せる少女の股丘から、スパッツを張り詰めさ

せる肉敵——そして、肛門までをがちりとホールドする。そして、むちむちと肉付きの良い二列の大陰唇と太腿とが織り成す三本の肉溝に埋まり込むように、吸盤状の縁が張り付く。これでは、ちよつとやそつとの事では剥がれてくれそうにもない……。

「いや……やめ……ろ……」

女の子の最も大事な、恥ずべき部位をすっぽり覆われてしまった。その恐怖と羞恥に、強気なマリサも流石に慄いてしまう。拒否の語調も弱弱しく変化してしまっていた。

（一体何なんだよ……やめてくれよ……）

マリサの恐怖を煽るためか、或いは恐怖を解すためか。この舌肉はウニョウニョと蠢動を始めたのだ。刺激を受けたマリサの股肉はみるみるうちに充血し、熱を帯び始める。

しかし、何かが、おかしい。

化け物が速かったのではなく、自身の感覚だけが異常に遅くなっていることに気付く。マリサはふと、メイドの手品を思い出す。感じとしては、あれに近い。自分以外の物が、速く動いている感じだ。

続いて、目を覚ました時の事を思い出す。毒霧。マリサは眠っていたが、果たして本当に眠っていたのか？ ほんの数瞬、気を失っていただけなのでは？ 『時間や速度の感覚が狂っている』。

（毒が意識に……感覚に直接作用しているのか!?）

むにゅ……むにゅ……。

化け物が全身を使うようにして股肉を揉み上げると、内側に並んだ無数のイボが陰唇の表面を出鱈目に爪弾く。しかし。

「ま、まさか……」

気付いてしまう。今、揉みくちやにされている陰唇。心なしか『遠い』。スパツゴしだからだと思っていたが、そうでは無さそうだ。今、本来感じてあるべき感覚とは一体どう言った物なのだろう。そして、それが訪れ

るのはいつなのだろう。

ぷりゅぷりゅぷりゅぷりゅ!

マリサの疑問や不安などお構い無しに、イボ舌は陰唇をこね回す。ぽつてりと膨らんだ大陰唇を押し潰すように割り開き、埋もれていた小陰唇までも責め立てていた。

肉と肉との溝を掻き出すように。本来なら敏感極まりない粘膜を、磨き抜く。

「お、奥まで……もういいだろ……やめてくれよ……」

疑問『本来感じているべき感覚とは一体』——その答えは、突如として現われた。

ズキンッ!

痛みとも取れるほどに鋭く尖った快感が、マリサの意識を穿つ。

「う……うあ……!」

ぞわ、ぞわ、と。股間から胴体を蝕むように、快感が這い上がって来る。(何だ……これ……体が……っ)

これは、波だ。感覚が波を打っているのだ。何も感じない時間があるが、それは『感じていないだけ』。蓄積した感覚は、高波が寄せるようにして一気にやって来る——マリサは、そう理解する。

理解したところで、この絶頂には抗えなかった——感覚の波は加速度的にマリサを襲い、一瞬で頂点を迎える。それはマリサが今までに味わったことが無いような、絶頂の大津波。

小陰唇と大陰唇に蓄積された快感は、バネが跳ねるような勢いでマリサの防壁を貫いた。

「イ——♥♥」

ピクッン!!

『イク』という言葉を遮るように、マリサの腰が、背中が、首が大きく跳ねる。声も出なかった。



股間から脳を貫く快楽電流に、全身を硬直させるマリサ。溜まりに溜まった快感は、執拗にマリサを追い詰め、離そうとしてくれない。

「あいつ♥♥♥ イグふうつつ♥ おおっ♥ イツ……くふふううううう♥♥♥♥♥」

ギクンツ！ ギクギクギクツ！

腰を懸命に前後に振り立て絶頂を振り解こうとするも、まるで効果が無い。次から次へと絶頂感がマリサを襲い、渦のように休じゅうの快楽神経を掻き回し続けるのだ。

「んほっ♥♥♥ おほほおっ♥♥♥ おっ♥♥♥ おっ♥♥♥ おほほほおほ♥♥♥♥♥」

耐え切れずに、浅ましい喘ぎが鼻から漏れ出る。それを恥じる余裕も、言葉を紡ぐ余裕すらも無い。イツている最中に何度もイカされれば、マリサでなくともこうなってしまうことだろう。

わなわなわな、と出鱈目に身体を揺ると、マリサは全身を弛緩させる。「はおおっ♥♥♥ はあおおおお……♥♥♥♥♥」

長く短い絶頂から解放されたものの、休じゅうを反響する余韻だけ残ったイツてしまっそうだった。しかし何とか肉体を繋ぎ止める。

頭の中で、満天の星が瞬いていた。脳が感覚を処理しきれていないのか、感覚が身体に追いついていないのかマリサには解らなかつた——が、過剰な快楽に意識は陥落しかけていた。

そんなマリサに対し、舌肉は容赦も慈悲も無い。ずりりりりいっ。

米粒と比べてもさらに細かい、肉質のイボ。それをふんだんに絡ませ、スパッツの中でふりふりと膨らんだ陰核を撫で始めたのだ。

女性の陰核は、男性の陰茎とは違い亀頭部分だけが露出している。言うなれば雁首に当たる部位で、快楽神経が密集しているところだ。密度で言えば、男性亀頭の十倍以上とも言われている。そこを摩擦されたのでは、

卒倒してしまう程だろう。

しかし今のマリサは、ほとんど何も感じない。言わば、無警戒のまま剥き出しの神経に快楽を無理やり蓄積させられていることに等しい。

「ダメっ♥♥♥ ダメだぜえっ♥♥♥ クリっ♥♥♥ クリトリスはやめてええっ♥♥♥」

懇願すれど、言葉の通じる相手でもない。何を目的としているのかマリサには理解出来なかつたが、この生物は執拗にクリトリスを責めてくる。

ぞりぞりぞりぞり。くちゅくちゅくちゅくちゅ。

ナメクジやカタツムリが『歯舌』というヤスリ状の器官で餌の表面をこそげ取るように——ぞり、ぞり、と——陰核に密集した快楽神経を、少しずつ、じっくりと磨き上げる。

先端、側面、根元。執拗極まる豆磨きだが、マリサには、まだ感覚として届いていない。

ちゅっ！ ちゅちゅ！ シコシコシコっ！

吸引にシゴキまでも加えながら、豆磨めは苛烈さを増すばかりだ——そして、その時が訪れる。

ギクギクギクンツ！

「ほぎいいい……♥♥♥♥♥」

解き放たれた絶頂感は、たちどころにマリサを襲った。

「おおっ♥♥♥ おほおんっ♥♥♥ おおっほほほおお……♥♥♥」

魂までも揺さぶるような爆発的な快感——たった一瞬で、何十回、何百回と言うクリアクメがやって来るのだ。最早、正気ではおれなかつた。

「おおっ♥♥♥ おっ♥♥♥ おっほほおおっ♥♥♥ んほほほっ♥♥♥ んのっほほおお……♥♥♥♥♥」

喉首をピンと伸ばし、杖を力一杯握り締め。白目を剥き、舌を突き出し。魔法少女は、イキまくる。

だが、それで終わりでは無かつた。高速スライドを繰り返す腰を這い登る物が二つ——。





# 奥付

発行サークル:Stapspats

執筆:翡翠石 (ヒスイ)

誌名:魔法少女プリティレイルム

発行日:2015/02/21

印刷所:ねこのしっぽ

PixivID:1473639

TwitterID:hisui\_spats

E-mail:spatz@hotmail.co.jp

※18歳未満の方の購入/閲覧を禁止します。

無断転載/複製複写/Webへのアップロードを禁止します。